

私たちは、今日から新しい年を歩んでいます。西暦2025年1月1日です。この西暦というのが、イエス様の誕生を紀元にしていることから、私たち聖公会では、西暦と言わず「救主降生2025年」という表現を使っていますので、私も年賀状には、「救主降生2025年1月1日」と書いて、出しています。「救い主がこの世に降って、お生まれになってから、2025年」ということなんです。ただ、前半の「救主」はいいのですが、後半の「降生」という字なんです、「降る、生まれる」と書くのが、現在では一般的なんですけど、「世に降る」「コウセイ」と書く伝統もあつたらしく、私が小学校の5年生のとき、サーバーを1年間やったことへの記念としてもらった聖歌集には「世に降る」という字が書かれていました。そして、以前働いていた熊本聖三一教会の礼拝堂の礎石にも「世に降る」方の「コウセイ」が当てられていました。

まあ、いずれにしろ、今日の福音書の最後にあるように、イエス様が生まれて、8日目に割礼を受けて、「イエス」という名前が付けられたことで、ユダヤ人の一員になられたことを、私たちは今日、記念するわけです。

ところで、「イエス」という名前は、マタイとルカの福音書に、それぞれ、名前をつけるいきさつが語られていました。

マタイの方では、1章21節で、主の天使が、ヨセフに現れて告げる言葉です。

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」と書かれています。イエスというのは、自分の民を罪から救う、救い主の名前だ、と言っているのです。イエスというのは、ギリシャ語的な表現であって、実際にイエス様が生活しておられた時には、「ヨシュア」というふうと呼ばれていたと言われていています。この「ヨシュア」は、「ヤーウエは救い」という意味です。ヤーウエは、神聖な神様の名前のことですね。そして、「ヨシュア」というのは、モーセのあとを継いで、イスラエルの民を約束の地へ導いた指導者の名前でもありました。旧約のヨシュアが、約束の地へ人々を導いたように、新約のヨシュアである、イエス様は、私たちが天国という約束の地へ導いて下さる方だ、と子どもたちへのカテキズムでは教えます。

では、ルカの方ではどうでしょう。1章31節。天使ガブリエルが、マリアさんに告げる言葉の中で、「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。」

このようにイエス様の名前の由来を書き残したルカは、福音書に続いて、弟子たちの活動を、使徒言行録に書き残していますが、弟子の筆頭格であるペトロがイエス様の名前について、語っているところがあります。

使徒言行録3章で、ペトロは足の不自由な男を癒すのですが、6節で

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言っています。そして、その人が癒されると大騒ぎになります。

ペトロとヨハネは逮捕されて、議会で取調べをうけるのですが、その時も、ペトロはイエス様の名前のことを言います。

10節から「あなたがたも、イスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この方こそ、『あなたがた家を建てる者にすてられたが、隅の親石となった石』です。ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」と証言しています。

イエスという名前が、罪から人々を救う者として、神様から与えられた崇高な名前であることを、ルカは伝えているのです。

そして、ヨハネによる福音書では、イエス様ご自身が、御自分の名前のことを言われている箇所があります。皆さん、ご存知でしょう。

14章14節「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」という箇所です。

これを根拠にして、わたしたちは、お祈りをする最後に「主・イエス・キリストの御名によって、お願いいたします。」と言っているのです。

しかし、「名前」が、呪文のように力を持っている、と短絡的に考えるのではなく、イエス様ご自身を表している言葉だと、考える必要があるでしょう。

たとえば「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には」という場合、「わたしのゆえに」とか「わたしのために」「わたしのことを考えて」といった具合に、イエス様ご自身と密接につながった表現なのです。

クリスマスの福音書に続く、ヨハネによる福音書1章16節には、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。」という表現が出てきます。「神の言が肉となってこの世に来られたイエス様には、神様の力が満ちあふれている。」という意味です。

「わたしたちが、神様と結びつく、力の源は、このイエス様なんだ。」だから、イエス様にしっかりつながって、天国という約束の地へ連れて行っていただこう、という、その信頼が「主イエス・キリストの御名によって」という表現を生むのです。

さて、このように、イエス様が、わたしたちに与えられたことによって、救いの道が開かれた、と私たちは感謝するわけですが、この「主イエス命名の日」に、もうひとつ、覚えておかなければならないことがあります。

以前の文語祈禱書では「主イエス命名日」という字が、ゴシックで太く書かれた下に、カッコつきで、(受割礼日)と書かれていました。現在は、特禱と福音書の最後にその言葉が残っているだけです。

しかし、たとえば、2000年にできたイギリスの祈祷書には、「主イエスの命名と割礼の日」という風に、一緒にした記念日になっていますので、もう少し、私たちも注目する必要があるのではないでしょうか。

この割礼というのは、ユダヤ教に限らず、アブラハムを祖先とする、イスラムの人たちの間にも、現在でも行われている習慣です。生まれたばかりの赤ちゃんのおちんちんを覆っている包皮の一部を切除することです。衛生的な意味もあるのですが、パウロは、これが、信仰の本質とは関係ないので、割礼の習慣のない、外国人には要求する必要はない、と、使徒言行録15章の、エルサレム会議で、押し切りました。

しかし、イエス様は、当時のユダヤ社会の習慣を守って、割礼を受けられた、ということ。これは、イエス様の意志、というより、ヨセフとマリアがその習慣を守った、ということになるのです。

イエス様は、当時の社会の中で、浮き上がった存在ではなく、貧しい家の一員となって、人々の苦労を共にされ、そんな環境の中から、人々の救いの道を開かれた、ということです。

ヨーロッパでは、「ユダヤ人」と言えば、イエス様を十字架にかけた悪者、というイメージがあります。そして、わたしたちも、福音書でイエス様の論争の敵としてのイメージばかりができあがっています。しかし、イエス様ご自身が、ユダヤ人であった、ということをおぼろげに忘れてしまっているのではないかと、ということが最近反省させられているのです。

10年に一度、村中でキリストの受難劇をする、ドイツのオーバーアマガウという村の劇は、歴史的には、ナチスが支援した歴史もあるのですが、紀元2000年に演じられた劇では、初めて、イエス様もユダヤ人の話すヘブライ語でセリフをしゃべる、ということになりました。また、パッションという映画では、出演者がみんな英語ではなく、ヘブライ語で話すことによって、ユダヤ人への偏見を捨てるように意図されて制作されました。

私自身、イエス様がどのように旧約聖書を読まれていたのか、大変関心があって、ユダヤ人の子どもへのモーセ五書の教えの本を少しずつ読んでいます。

主イエス命名の日、そして割礼の日にあたり、イエスという名前が、わたしたちの救いのために与えられた名前であり、イエス様ご自身もユダヤ人として歩まれた、ということをおぼろげに、改めて確信を持ちたいと思います。